

鴻門之会再読―「読む」を考える試みとして―

渡邊 大（文教大学）

◎発表梗概

発表者は勤務校（文学部中国語中国文学科）二年次の選択必修科目「中国古典学講義Ⅱ」で鴻門之会を取り上げている。高校の定番教材をあえて扱うのは、読むことを楽しむとともに、読むことについて考え、研究について理解を深めるのに、鴻門之会は格好の素材であると考えてのことである。

授業では、登場人物の言動から心情を読み取り、人物像を固めていくという読みの基本から、対称性、重層性といった観点による構造の理解、作品と作者・読者の関係、素材・事実の問題、また、形式のもつ意味、注釈や先行研究の利用など、読むことにまつわる諸々について、学生とともに楽しみながら考えている。

書かれていることから何を読み取るのか、問いを立て、仮説を掲げ、検証していくこと、小さな疑問を大きな問題に繋げていくことなど、好悪・善悪・優劣といった見方から離れて、研究の視座を獲得するための発表者の試みを報告し大方の指教を仰ぎたい。

◎中国古典学講義Ⅱの位置づけ

一年次（全て必修科目）

中国語文法・講読Ⅰ・Ⅱ、中国語会話作文Ⅰ・Ⅱ

中国歴史・地理基礎Ⅰ・Ⅱ、中国学概説、研究基礎演習、中国古典基礎演習

二年次

必修科目 中国語文法講読Ⅲ・Ⅳ、中国語会話作文Ⅴ・Ⅵ

選択必修科目

A（中国語学・応用中国語）、B（中国古典・教養）、C（中国現代社会・文化）のうち、いずれか一つのコースに所属し、所属コースから二十単位以上、所属コース以外も含めて三十二単位を履修。

*中国古典・教養コース配当科目

二年次 中国古典学概説Ⅰ・Ⅱ、中国古典学講義Ⅰ・Ⅱ、中国古典学演習ⅠⅢⅣ、文言文演習ⅠⅢ

三年次 中国古典学講義Ⅲ・Ⅳ、中国古典学演習ⅤⅦⅧ、文言文演習ⅣⅤⅥ

発表者が担当している中国古典学講義Ⅰ（春学期）・Ⅱ（秋学期）は、中国古典・教養コース二年次の学生を主たる対象とし、中国古典学概説を承け、三年次から始まる卒業研究を視野に入れつつ、各論（Ⅰは論語⁺、Ⅱは史記）によって、中国古典に関する基本的知識、研究方法について理解を深めることを目標としている。

⁺ 孔子の伝記と思想、論語の成立や注釈、日本における受容など

◎中国古典学講義Ⅱの構成

全十五回中、十～十二回を鴻門之会の講読、三～五回で史記・司馬遷概説、伯夷列伝。

◎ 鴻門之会講読の進め方 * 原文・訓読・現代語訳及び解説資料は初回に配布

- (一) 鴻門之会 (沛公旦日、沛公起如廁、因招樊噲出) * ワークシート① (問いを發し仮説を立てる)
- (二) 後段 (沛公已出、沛公至軍、立誅殺曹無傷)
- (三) 前段 (行略定秦地、項王許諾) * ワークシート② (NHK「その時歴史が動いた」をみて)
- (四) 高祖本紀、留侯世家における鴻門之会

◎ 到達目標 書かれていること (書かれていないこと) から何が読み取れるのかを考える

○ 構造を捉えること、俯瞰して眺めること

・ 対称性

項王 范増 項莊
沛公 張良 樊噲

* 范増の項莊召喚⇄張良の樊噲召喚

* 対称性を破る項伯の存在

・ 反復性

項王…「壯士、賜之卮酒。」と「壯士、能復飲乎。」

項王…「賜之卮酒」と「賜之彘肩」

樊噲…「今沛公先破秦入咸陽、毫毛不敢有所近、封閉宮室、還軍霸上、以待大王來。故遣將守關者、備他盜出入與非常也。」と沛公…「吾入關、秋豪不敢有所近、籍吏民、封府庫、而待將軍。所以遣將守關者、備他盜之出入與非常也。日夜望將軍至、豈敢反乎。」

沛公…「今者出、未辭也、為之奈何。」「良乃入、具告沛公。沛公大驚、曰、為之奈何。」「沛公默然、曰、固不如也、且為之奈何。」

・ 重層性

項羽と劉邦の直接対決⇄范増と張良の智謀の戦い

和解の宴席⇄劉邦暗殺の企て

項羽による主導権奪取⇄劉邦による天下獲得

* 范増…「奪項王天下者、必沛公也」

・ 多声性

項羽本紀における鴻門之会と高祖本紀・留侯世家における鴻門之会

* 紀伝体という形式のもつ意味

* 史記は史書か？ 司馬遷にとつての史記とは？

○ 細かく深く読み込むこと

沛公の謝罪 (ふたりの様子、為人は？) / 席次 (上座は？ 席次の意味は？) / 范増の目配せと項王の黙殺 (范増が沛公暗殺にこだわる理由は？ 項王が黙殺する理由は？) / 范増の項莊召喚 (なぜ自ら手をくださないのか？ なぜ項莊なのか？ なぜ劍舞なのか？) / 劍舞の申し出 (項王はなぜ許すのか？ 項王の様子は？) / 項伯の劍舞 (なぜ劍舞の相手をするのか？ 他の登場人物の反応は？) / 張良の樊噲召喚 (張良はなぜ宴席を離れるのか？) / 樊噲の闖入 (項王の反応の素早さはなぜ？ 張良の「沛公之參乘樊噲者也」の意味は？ 項王の二度の「壯士」の違いは？ 「生彘肩」の意味は？) / 樊噲の弁明 (前夜の沛公の科白との類似は？ 項王の表情は？) / 沛公の中座 (宴席を離れる理由は？ なぜ樊噲を連れて行くのか？)

◎講義再録(抄)

〇、読むとは(第二回)

さて、ところで「読める」とはどういうことでしょうか。漢文でいえば「漢字の意味が分かり」、「語と語の関係や句の構造を把握でき」、「訓読あるいは現代日本語訳できる」ということでしょうか。それも「読める」には違いありませんが、文学部で学ぶ皆さんには無邪気に「はい」とはいえないのではないのでしょうか。もちろん答えはそんなに簡単にはできません。この講義ではその「読む」ということについて考えるため、われわれにとって馴染み深い「鴻門之会」をあえて「読み直す」体験を試してみようとおもうのです。講義を通して自身の「読み」にどのような変化があるのかを追っていきましょう。

一、登場人物と人間関係、話の流れ、登場人物の把握(第三回)

前回は、みなさんにあげてもらった「鴻門之会」の疑問を共有し、ワークシート①に取り組んでもらいました。今回は数々の疑問を考えながら読みを深めていきたいとおもいます。その前に「読む」ということの基本をおさらいしておきましょう。物語や小説において「登場人物の科白や行動からその心理や人物を読みとる」というのは基本中の基本でした。「こういう場面でこういう事をいう／するのだから、こういう心情なのだろう、また、こういう性格なのだろう」と考えるわけです(実は、その先に、作者の意図や時代を考えるという作業もありますが、それはひとまずおいておくこととしましょう)。その時、大切なのは、「作中の人物には一貫性がある」ということですよね。人間ですから、怒ったり、笑ったりしますし、時には矛盾するような言動をしたり、場合によっては、成長したり、墮落したり……、もするわけですが、それでも、そのことが「ああ、この人だから、こういう(一見矛盾した)態度をとるのかあ」、「なるほど、あの出来事がこういう影響を与えたのだな」ということが読者に伝わらなくてはなりません。逆にいうと、読者はそうやって作品を読まなければならないし、そのようにして読める作品がよい作品(の条件のひとつ)なんだとおもいます。

当然ですが、場面はひとつではありませんから、

(一) ある場面から登場人物の心情を読み取る

(二) さまざまな場面でそれを繰り返して登場人物の性格を読み取る

(三) その性格が全ての場面における登場人物の言動を説明できるか検証する

というのが読みの基本サイクルになるわけです。

ある箇所で行き詰まったり、矛盾が出て来たら、それは読み取った心情や性格に問題があったということになりますから、改めて考え直すわけです。

ところで、前回、「鴻門之会」を「読みながら頭の中で情景を思い浮かべる」ようにお願いしましたね。この情景というのは、ただ起こったこと、だけではないんです。

登場人物の行動や科白が「どのような様子で行われたか」「どのような口調で語られたか」

を思い浮かべなくてはならないんです。そして、「言動には、登場人物の内面が反映されている」はずですよ。ところが（読んでいて気づいた方も多いとおもいますが）「鴻門之会」には、「登場人物の心理描写はほとんどない」んですね。登場人物の動作や科白から成り立っているんです。ですから「言動から、登場人物の内面を判断するしかない」わけです。なんだか同語反復みたいですが、さっきの(一) (三)の作業ですね。さきほど「同じ文章を読んでも、思い浮かべる情景は読者によって様々」だということをいいました。これには、「鴻門之会」には「登場人物の内面がほとんど描かれていない」から、という理由があったんですね。

たとえば、項王に謝罪する時の沛公、みなさんはどんな情景を思い浮かべていましたか？沛公が、①項王に誠実に向き合い心から謝罪しようとしている、のと、②実は王位に下心をもっているのにそれを隠し項王を懐柔しようとしている、のとでは随分違った情景になるのではないでしょうか。

あるいは、范増が玉玦を挙げて目配せをした時、項王は「黙然として応ぜず」であったと書いてありますが、その時の項王の心情はどのようなものだったでしょうか。文章には何も書かれていませんが、きっと項王の表情にはその心情がでているはずです。それが書かれていないから鴻門之会を読むのは難しいんですね。

ある場面の人物の言動とそこに込められた心情を考え、その人物の人柄を考える、別の場面からそれを検証していく、という方法をとるしかないからです。でも、だから、鴻門之会を読むのは面白いともいえます。表面上は割と単純な情景描写なんですけど、実はその背後に、こんな複雑な心理が含まれているのか！という体験ができるんですね（それを共有するのがこの授業の最大の目標です）。

二、情景を思い浮かべるために（第三回）

その時に、ひとつよい方法があって、それは「演出家になったつもり」で、「鴻門之会」を読む、ということなんです。演出家ですから、役者には、実際に演技してもらわなければなりません（当たり前ですが……）。先ほどの、沛公の謝罪の場面、あるいは、項王の黙殺の場面、みなさんなら、どう演出しますか？それから、「言動の背後には登場人物の（一貫した）人間性が存在している」のも忘れてはいけません。あちらとこちらで人物がちぐはぐでは困ってしまいますよね。

ひとつ例を出してみましよう。

項王は范増の目配せを黙殺しましたよね。なぜ范増の提案を「黙殺」したのか？——それは、項王は「沛公を殺したくない」からです。なぜ「沛公を殺したくないのか？——それは……この点は、みなさんに考えてもらうことにしましょう。

鴻門之会を「読む」ため、あるいは演出するためにはあれだけの「なぜ」にこたえなくてはならないですね。また、この「なぜ」はどんどん深まっていくんですね。たくさんの「なぜ」

をみつけて、それにこたえていくことは、「読み」を深めていくためにとっても大切な方法です。

さて、理由はともかく項王は「沛公を殺したくない」んですね。

では、みなさん、ひとつ考えてみてください。この後、范増が、一旦、宴席をはなれて項莊を呼び入れますよね。で、劍舞に事寄せて沛公の殺害を命じるわけです（ここにも「范増はなぜ自ら手をくださないのか」「なぜ劍舞なのか」といったなぜが出てきます）。項莊は言われたとおりに宴席に入り、まずは挨拶します（これから殺そうとしているのに長生きしてください！というんでしたね）。そして劍舞を願ひ出るわけです。その時、項王、なんていいいます？——「諾」というんですね。「よし」という意味ですよ。この場合、劍舞を許すということは、沛公を殺してよい、ということですよ。項莊がなんのために劍舞を願ひ出たのか、項王分かってないんでしょうか？だとしたら相当おバカですよ。だって范増が何度も目配せしてましたよね。それを無視してたら、一旦、宴席をはなれて、しばらくしたら項莊（これ項王の一族の屈強な若者でした）を連れて戻ってきて、その項莊が「劍舞いきます！」っていうんですよ。入ってきた瞬間から、范増がなにか企んでいる……て分かりますよ！（なんなら范増が出ていったときから分かります）でも、項王は「諾」というんです。こうして「范増の目配せは無視するのに、項莊の申し出は許すのはなぜ？」を考えなくてはならなくなるんですね。

理由はいくつか考えられますね。

①「項王は劍舞の意味が分からなかった」（すると項王はおバカということになります）。

②「気が変わった」（するとなぜ気が変わったのかその理由を考える必要があります。またこの説をとると、范増の合図を無視した理由を考えなおす必要がありますね。誤解が解けた以上、沛公を殺すことは正義に悖ると項王が考えていたのなら、ここで劍舞を許さないはずですよ）。

項王の「一見矛盾する行動」をどう説明していくか、どう解釈すれば項王という人間を理解できるのか、これが「読む」ということの第一歩なんだとおもいます。

で、我々演出家は、その時の項王の心情を「諾」のひと言に込めて演技してもらわなきゃいけないわけです。項王がおバカなら、上機嫌で「イイよっ！」（劍舞大好きっ♪）っていうわけですが、そうでないなら、どんな風にこの科白を口にするのか、（それはどうしてそうなのか、場面と項王の性格から、そうならざるを得ないということをきちんと説明できた上で）演出しなければいけないわけです（そう考えると演出家って凄いですね。台本を隅から隅まで「読み込んで」、役者の一挙手一投足まで意味を込めて表現してもらわなければいけないわけです。だから演出家は偉いんですね……）。どうですか？ひとつの「なぜ」だけでも結構手強そうですね。

演出するためにもうひとつ大切なことがあります。それは「動作や科白のない人物にまで演出を施さなければならない」ということです。

ここも例を出して考えてみましょう。

宴会が始まると項王と沛公にあまり科白がないんです。項王は、樊噲とのやりとりではそれなりに話していますが、その他は「諾」と「坐」くらい、沛公に至っては、最後に「樊噲を招きて

出づ」てありますけど、科白そのものは出てこない。これなぜなのでしょう……。

いうまでもなく、このふたりは鴻門之会の最重要人物です。ですから、科白や動きのない時でも、項王が、沛公が、どんな表情をしているのかを考えなくてはならないんです。范増が目配した時、項莊とともに宴席に入ってきた時、項莊が劍舞を願い出たとき、劍舞の最中、沛公は、項王は、どんな表情をしていたのでしょうか。

それから、沛公だって范増が自分を狙っているって分かっているはずですよ。それなのに何も言わない。何故なのでしょう。そうです、そんなこと言えないからです。言ったらそれこそ范増の思うつぼです。はあ、こちら余興に劍舞披露したいだけなんですけど、因縁つけるんですかあ？ ちょっと項王さまあ、こんなこといつてますけどお、ドーしちゃいますう、って、なりますよね。だから何もいえないんですね。沛公側は黙っているしかないんです。沛公は一体どんな顔していたのか？ 演出家としては是非とも考えなきゃならないですよ。

ほかにも項伯はなぜ劍舞の相手をしたのか、それに対して、范増はどうして止められないのか、という疑問もわかりますが、それも「あくまでも余興」だからなんですね。そう考えると和解のための宴会という設定が非常にうまく機能していることが分かるのではないのでしょうか（項伯がなぜ劍舞の相手をしたのかについては、また別に指摘しなければならないことがありますが、今それは置いておくことにしましょう）。

みなさん、こんなこと考えながら、読んでました？ 初回の授業で、「漢字の意味が分かり、語と語の関係や句の構造が分かり、現代日本語訳できる」だけでは「読めた」ことにはなりませんよ、といいましたが、この授業でいう「読む」は、その先にあるものなんですね。

三、ワークシート① 解説（第五回）

問4 范増が沛公の暗殺にこだわったのはなぜでしょう？

これは簡単ですね。范増は沛公が項王を脅かす存在であることを見抜いているからです。項莊にむかっていった、「しからずんば若が属皆まさに虜とする所と為らんとす。」という科白がそれをよく示しています。項王には見えていない沛公の資質を范増はちゃんと見抜いてるんです。だから范増にとってこの鴻門之会は絶対に逃してはならない好機なんですね。范増、恐るべし、です。でも、項王にいうこときいてもらうのは難しいんです、ザ・俺ですから。沛公はあなたのライバルですよ、なんていったら項王は反発しちゃうわけです。また、いつどこでどんなスイッチが入るか分からないのが項王なんです（この点についてはこれからエピソードを紹介します）。亜父なんて呼ばれて普段は尊敬されていても范増は項王に憚るところがあつたんです。

問5 項王が范増の目配せを無視したのはなぜでしょう？

項王の義理堅さや情の深さを理由にする人も多いとおもいますが、根本にあるのは、やっぱり、ザ・俺なんだとおもいます。項王は沛公のこと、なんともおもってないんですよ。沛公が謝罪した以上、咸陽は自分のものになるんだし、さっさと宴会して帰そうという程度なんです。

でも、范増はあきらめないんですね。忘れてはいけないのは、これ、項王のためなんだというところですよ（范増は一見悪役にみえるんですけど、でも、やっぱり自分自身を全うするために生きているんです。単純な善悪とか好悪とかで割り切れない陰影の深さを描くのが『史記』の魅力です。昔の戦隊ものとか時代劇とか、もうでてきた瞬間から、あ、これ悪人です！て分かりますよね。『史記』はそうではないんです。ボクは、後に范増が項王のもとを去るシーンではそつと後ろからハグしたくなるくらいなんです）。

一方、項王には危機感なんてないんです。だから、玉玦で何度も合図されると段々機嫌が悪くなってきます。それは、卑怯は許さないとこの正義感や沛公に対する優しさからくるものではないんです。俺が許すっていつてるんだ、とか、こいつ（沛公）が俺のこと脅かす存在だというのか、しつこいぞ范増、という不機嫌さんですね。そして范増も項王がそういう人間であることを十分知っているんですね。だから自ら手をくみださず一計を案じるわけです。

問7 項王が項莊の劍舞の申し出を受け入れたのはなぜでしょう？

これはもう面倒くさかったからということですよ。そこまでのなら勝手にしろ、と。この「諾」は不機嫌で投げやりな感じだったとおもいます。繰り返しになりますが、范増の合図を無視しておきながら、項莊の申し出を受け入れた底には、項王の自尊心と沛公への無理解があったことを見逃してはなりません。項王は沛公など齒牙にもかけていなかったんです。

四、席次について（第七回）

前々回、前回は鴻門之会をめぐる「なぜ」を通して「読み」を深めてみたつもりです。いかがでしたか？ 世界を所与のものとして受けいれている限り、新たな発見は生まれません。ですから、どんなに些細でも疑問を持つことは、「読み」を深めるための一歩であるだけでなく、研究をすすめていく上でも非常に重要です。それからもうひとつ、小さな疑問を大きな疑問に繋げていくことも大切です。大きな疑問というのは、人はなぜものを書くのか？ でも、事実とは何か？ でも、なんでもいいんです。もちろん、答えなんてないんですが、そういう大きな問題意識を抱えていると、一種の水準器みたいなはたらきをすることがあるんですね。みなさんも、物語とはなにか？ とか、古典とはなにか？ とか、自分の中に大きなテーマを設定してみてはいかがでしょう。

さて、小さな問題とは、『史記』でいえば、たとえば、豚の生の肩肉問題、王位についていないのになぜ項王問題など沢山ありましたね。

それから前回、少しだけ触れた鴻門之会の後段で、沛公が樊噲を連れて宴席を抜け出した後、戻る戻らないってグズグズしてたという話しましたよね。沛公は、樊噲等とそのまま項王陣営を抜け出し、張良に後始末を任せるだけでなく、俺、いまから樊噲たちと自陣へ戻るから、近道いけば二十里だし、あなたは俺が軍営に戻った頃を見計らって宴席に戻ってくれ、て言い出すんですね……。それって、みなさん、心配になりませんか？ 宴席、どーなっているんだ？ 項王、また怒り出すぞって。当時の二十里って約十キロですよ。沛公は（自分だけ！）馬に乗って戻るっていったって結構時間かかりますよどんなに早くとも二十〜三十分、山道などの条件を考慮にいれて四十分

くらい？ 樊噲たち御供は徒歩だから……やっぱり項王怒りだしそうですね。こういう一見小さな問題も実は大きな問題に繋がっているんです、というのが今日のテーマのひとつです。

では、とぼしていたワークシート①の問3「宴会の席次」について考えてみましょう。宴会の席次については配布資料でもそれぞれ取りあげていました。ある指導書の解答例には、「項王・項伯が東を向いて西に座り、范増が南を向いて北に座り、張良は西を向いて東に座り、沛公は北に向いて南に座った」と書いてありましたね。また、留意点には、「この席次の記述は、会見の波瀾を予想させるものとして重要である。この時、項王と沛公は和解したのであるから、二人は対等の関係にあり、しかも沛公は項王の客でもある。しかし、会見の席次の有位は項羽側で独占され、沛公の危機的状況を示すものとなっている」とありました。

さて、まずは、この席次で一体だれが上座なのか、ということが気になりますよね。これについてはいくつか論文が書かれていますので紹介しましょう。

岡安勇「中国古代史料に現れた席次と皇帝西面について」(『史学雑誌』九二・九、一九八三年)は、「賓主間の席次においては東面の席が上位で、その次が南面である……項羽本紀の場合、項羽は鴻門の会の時点ではまだ項王とはなっておらず、楚の懷王のもとの將軍であつたから、項羽に「臣」と称していた沛公(劉邦)に対して、「南面・北面」の君臣間の席次で臨むことはできなかったであろう。したがって項羽は会見の場では賓主間の席次によって自ら上座の東面の席に就き、武將の范増も南面の席に就くことで沛公に優位を示した、と解することができよう」としています。

また、吉原英夫「古代中国の座位」(『漢文教室』一四八、一九八四年)は、『史記』における席次をすべて調査して、堂上・堂下の場合(北に座って)南面が上座、同一平面の場合(西に座って)東面が上座という規則を見出せるとして、やはり、鴻門之会における席次を、①項王、②范増、③沛公、④張良としています(吉原論文と岡安勇論文、ともにLMSの「関連文献」にUPしてあります)。

ふたつの論文の結論は、現在、ほぼ通説となっていますが、ボク自身はやや疑問を感じています。座次については、君臣は南北(君主は北に座って南面し、臣下は南に座って北面する)、賓主・師弟は西東(賓客・師匠が東に座って西面、主人・弟子は西に座って東面)というのが、基本的なルールでして、そのこと自体に異論はありません。問題は、四方を取り囲むような例が『史記』にはほとんど見られないことなんです(たしか鴻門之会を含めて二例のみです)。

吉原論文は、君臣、賓客、師弟などといった人間関係や、依頼・饗応といったその場の状況を捨象して、堂上堂下、同一平面という位置関係だけで上座下座を決めている点で、岡安論文は、関係・状況を考慮しているにもかかわらず、鴻門之会では項王がみずから賓客の位置に座ったことになってしまふ点で、全面的には賛成できないんです(鴻門之会はどう考えても項王側が主人、つまり、沛公をもてなすホストって恰好になっていますからね……)。

鴻門之会の状況だけからいえば、上座は范増で、項王は上座を亜父である范増に譲った、それは、表面上は范増を敬つてのことだが、実は、劉邦を范増の下座につかせるとともに、宴会にも大して興味はなかった項王の気持ちをあらわしている……ととるのが一番よいようにおもえるので

す。でもまあ確たる証拠があるわけではありませんので、通説にしたがって、項王が上座、亜父が次席、その亜父よりも沛公は下座につかされたということでも一向にかまいません。

ただ、この席次からは、まだまだ多くのことを読み取るべきであるのに、これまではそのことがあまり指摘されてこなかったのではないか、とはおもっています。

実は、この席次が示されていることで、鴻門之会の劇的展開が、読者にありありと、目に映るように、伝わるようになっていとおもうんです。これは少し考えれば分かることですし、実際、そうした指摘もありますが、樊噲が突入してくるとき、どちらから入ってきますかね。「帷を披きて西に嚮いて立ち」とありますから、東側に入り口があるんですね。軍営のことですから、大きなテントのようなものが張られていて、入り口に幔幕がさがっていたんでしょう。だから樊噲が（東の入り口から幔幕をばつと跳ね上げて）闖入してくると、熾烈な剣舞のさなか、ただ独り不機嫌な沈黙をかこっていた項王がいち早く反応し、剣に手をやって、ばちばちいつと、ふたりの視線がぶつかるわけですね。樊噲は目を瞋して項王を視る、項王は剣を按じて跪きて曰わく……、とありましたね。あからじめ項王の座席が示されていますので、その様子が読者にはちゃんと浮かんでくるんですね（突入してきた樊噲が項王の後頭部を睨みつけてもちっとも絵になりませんもんね……）。

それから范増が玉玦をもつて項王に合図をおくる場面がありました。その時、向かいにいる沛公の気持ちになってください。范増、なにしてるんだろ、お気に入りの袂なのかな、なんておもいませんよ。おい范増、もう項王は許したっていつてるだろっ、なんでそんなことすんのオておもいますよね。范増は沛公の真正面に座っているんですから、それがよくみえる席次なんですね。で、なんでかよく分からないけど、沛公の左手にいる項王（范増よりも項王の方が沛公には近い位置に座っているんですね）はどんどん不機嫌になっていくわけですよ。それが項伯越しに感じられるんですね、沛公には。これは恐ろしいですよ。

剣舞の場面を考えてみても、范増に連れられて入ってきた項莊は、項王の左正面から項王と沛公に挨拶をして、剣舞を舞い始める、すると項王の脇に控えていた項伯がさっと立ち上がり、沛公を庇って剣舞の相手ができる配置になっているわけですし、張良がひそかに樊噲をよびにいくときも、沛公が樊噲を誘って厠に立つときも、項王・范増の前を通ることなく、宴席を外すことができる構図になっているんですね。

よくできているとおもいませんか？ この席次、まるで舞台のようですね。

実は、（舞台ではないんですが）鴻門之会を語るときには必ず言及される、宮崎市定の「身振りと文学——史記成立についての一試論——」（『中国文学報』第二十冊、一九六五年）という論文があるんです。その中で、宮崎市定は、この鴻門之会は「全段が身振りを伴って話された語り物であったにちがいない」といつているんですね。語り物とは、一種の口承文芸ですね。当時娯楽の場でもあった市などで身振りをともなって語られた演し物が司馬遷によって『史記』に取り込まれたと宮崎市定は考えたのです。鴻門之会以外にもそのように考えられる箇所を『史記』の中からずいぶん沢山あげています。論文は「関連文献」にUPしてありますので、詳しくはそちらを読んでもらいた

いのですが、宮崎市定はどのようにして鴻門之会が語り物に由来すると考えたのでしょうか。ひとつは重複が多いということです。席次の場面がまさにそうでしたね。この席次に対し、宮崎市定は次のように述べています。

これは単に読むための文章としてならば、あまりに文章が重複しすぎる。……省略しても話の筋道だけはちゃんと判るのである。単に文章としてだけ見れば、重複は煩雑であるが、もしそこに語り手がいて、項王は右手に項伯を従えてこのように東嚮して坐りましたぞ。亜父はこのように南嚮して坐ります。亜父とは范増のことですぞ。沛公はこのように北嚮して坐りましたぞ。張良はすぐその側にこのように西嚮して待っております。と、言葉とともに一々坐る仕草をして見せたなら、この位の重複は一向に苦にならない。(……中略……) 何れにもせよ、語り手は、坐という度毎に威儀を正して、坐る仕草をして見せたのであろう。そして繰り返し動作は一種の莊重感を起こさせる効果がある。同時にこのような舞台の設定によって、後に項莊が入閲し、更に樊噲が闖入する場所を暗に指示しているのである。この場合における同様な句の四回にわたる反復は、僅かに、「亜父者范増也。」の一句で単調を破られる。併しそれは単に修辭的な効果をねらっただけでない。これは身振りをもって実演する時、必然的に起こる時間の空白を埋めるための埋草として必要であったのである。即ち次図で見ても判るとおり、項王の身振りから亜父の身振りに移るのは短時間ですむが、亜父の座から次の沛公の座に移るには、より多くの距離を歩かねばならぬ。この空白の時間を、「亜父とは范増のことですぞ。」といいながら歩いて埋めたのであろう。范増が亜父と称せられたことは、単に判らせるための説明であれば、もっと他に適当な入れ所がある筈である。事実、漢書「高祖本紀」では、鴻門の会の座次を省いてしまったので、亜父という言葉とその前の范増が項羽に勧めて沛公を討たせようとした条に出し、同じく資治通鑑ではその後の、玉斗一双を范増に献ずるの条に出している。恐らく漢書における亜父の出し方が最も適切であろう。

いかがでしょうか。宮崎市定は席次の叙述における重複や「亜父とは范増なり」という一句に疑問をもち、語り物であったならそのことが説明できる！と考えたわけですね。説得力、ありませんね。でも、それだけではないんです。よい仮説というのは、それによって様々な事柄をうまく説明できるようになるものなんです。みなさん、気がつきました？

そうなんです！ 鴻門之会の一段を後世の語り物に由来する考えると、当時、まだ西楚の霸王と号していなかった項羽が項王と称されていること、(鴻門之会の前段で) 漢帝国成立後に置かれた新豊という地名が登場すること、樊噲に与えられたのが生彘肩であったこと、劉邦が覇上まで逃げ帰る間に張良はどのように時間を稼いだのか、それからあの項羽がどうして黙って待たされていたのかなどの疑問が氷解するんです。後世の語り物なら、項羽が項王と呼ばれていても、後世の地名がでてきても、まったくかまわないんですね。豚の肩肉は生の方が樊噲の勇猛さが際立ちますし(前にも指摘しましたが、この「生」一字について、色々な人が色々なこといつてるんです。このことについては吉原英夫「鴻門の会の「一生彘肩」」、『高校通信東書国語』二〇八、一九八一年) がまとめていますの

で、やはりLMSの「関連文献」にUPしておきます）、張良が後始末を引き受ける場面ではかかる時間が長い分だけ沛公のへたれぶりと張良の立派さが浮き彫りにされるわけです（こういうのって演じものならではお約束ですもんね。おい、宴席どーすんだ？項王怒るぞっ！みたいな嫌な客は放っておくわけです。あるいはそれを感じさせない演出・演技が演じ手には求められるわけです）。

でも、それだけではないんです。よい仮説というのは、そこからさらに大きな問題を提示してくれるんです。この場合は、じゃあ『史記』にとって事実ってなんなのか？とか、『史記』は本当に歴史書なのか？とか、司馬遷は『史記』編纂にあたって原資料にどの程度手を加えたのか？とかいう問題ですね（そしてこういう問題には実はまだ定説ってないんですね。ついでにここでいっておきますと、最近、出土資料との対照研究が進みまして、『史記』は先行する諸資料の切り貼りできているという説が有力になってきています。もし、そうだとしたら、司馬遷は『史記』の作者としてよいのか？という問題がでてきますね。最近、文学の立場から『史記』を研究する人が減っているのはそれが一因です。そのことは、たとえば、谷口洋「悲劇の星雲」との格闘…文学としての「史記」研究序説（『中国文学報』七〇、中国文学会、二〇〇五年）などを読むとよくわかるとおもいます。これもUPしてあります。ボク自身は『史記』が切り貼りであっても、『史記』の作者は司馬遷として全然かまわないし、むしろそのような形式をえらんだ点にこそ、司馬遷の『史記』編纂意図が込められているのではないかと考えています。このことについては、また、改めてお話ししたいと考えていますが、今、少しだけ、ボクの文学に対する考えを説明しておきますと、史学は、事実と虚構を腑分けして事実を対象にしなければなりません、文学や思想にとつては、書かれている内容が、事実か虚構かはまったく関係ないんですね。文学が問題にするのは、事実か虚構かではなく、何が書かれているか、それがどのように書かれているのか、それはどうしてか、ということだからです。我々はいついつい事実に囚われてしまっていますが、そこからどう自由になるか？も、文学にとつて、とっても大事なことだとおもうんです）。

鴻門之会における席次から、何が読み取れるのか？宮崎市定の論文を紹介しながら考えてきました。こういう、それまでだれも思いつかなかったけれども、そういわれると、そうとしか考えられない、そう考えると、ほかの部分まで実によく分かる！というような研究は実はなかなかできません。では、どうするかというと、ひとつは先行研究をさらに精密にしたり、対象を拡張したりするんですね。たとえば、この講義でみたように、そう考えると、項王という呼称や新豊という後代の地名も説明できますよ！とか、あるいは『史記』のこの部分も語り物じゃあないですか？とか。それからもうひとつは少し目先を変えてあげるんです。たとえば、ホントに語り物なのか？実は複数の人間で演じられた舞台劇の脚本なんじゃないの？みたいな感じです。というのは、鴻門之会ってあまりにも劇的なんですね。そのことは演出家になったつもりで鴻門之会を読んできたみなさんにはよく分かってもらえるんじゃないでしょうか。直接的な心理描写はほとんどなく、登場人物の内面が科白や行為を通して表現されること、項王・沛公両陣営の対称的・対照的人物造形、范増・張良による項莊・樊噲の召喚、項莊・項伯による剣舞、項王による樊噲に対する挑発と克服、樊噲による項王に対する弁明と説伏、等々、鴻門之会にみられる対称性・反復性はいかにも演劇的ではないでしょうか。項王と呼ばれていること、後代の地名がでてくること、時間が伸

縮自在であること、これは演劇であつても矛盾しませんもんね（ただ、宮崎市定にインスピレーションをもたらした「亜父とは范増なり」はどうでしょう……。舞台劇説ではこれを説明するのは難しいんですが、無声映画のように、演者とは別に語り手がいたのかもしれないね）。

鴻門之会が、実際に複数の人物によつて演じられていたと考えられると、（いざ宴会がはじまると）項王や沛公の科白や動きが少ない、というのも、いかにも必要な、そして最も効果的な演出のようにおもえてくるんですね。たとえば観客からは項王や沛公の姿は見えにくいんです。項王の手前には項伯が控えていますし、沛公は背中しかみえないわけです。そうすると観客は范増が袂を持ち上げて合図する様子はよく見えるんですが、項王や沛公がどういう顔をしているのかはよく分からないんですね。宴会の各場面で沛公がどんな気持ちかみなさんに考えてもらいました。

（宴会の開始） 助かったあ♪宴会すんだら帰えれるう♡

（范増の経略） おい、范増、やめてえ、あれ？項王ゴー出さないの？あれ？不機嫌？？

（項莊の召喚） 絶対なんかする気だ、長生きして？うそだああ！剣舞？え剣舞？

（項伯の剣舞） うわあ項伯さんも？剣舞！よく分からないけどとにかく頑張つてえー

（樊噲の闖入） もうなんだか分からないい……とにかく樊噲、なんとかしてええー

（項王の沈黙） もう……限界です……自分、廁、いきます……樊噲、おまえも、ほら。

と感じでしたね（ちがうかな……）。まあいずれにしてもこんなの演じられる役者なんているのかなっておもうくらい、本当に難しそうですね。でも、沛公の背中しかみえなかったらどうでしょう。演者の顔が見えないからこそ、観客は、沛公の背中越しに、范増の合図や項莊の剣舞を、まるで自分が沛公になったかのように感じられるのではないのでしょうか……。

五、留侯世家、高祖本紀における鴻門之会（第九回）

まず留侯世家から。沛公が諸侯に先だつて関中入りを果たし、秦の宮殿に入城したあたりからでした。鴻門之会では（懷王との約定によれば、そうする権利があつたにもかかわらず）沛公は宮殿を封鎖し、軍を覇上に返したことが、潔白を示す証拠として、樊噲の口から次のように語られていました。

今沛公先に秦を破り咸陽に入る。毫毛も敢えて近づくる所有らず。宮室を封閉し、軍を覇上に還す。以て大王の来るを待てり。

また、鴻門之会の前夜には、張良のもとにかけつけた項伯に対して、沛公みずから「私は関中に入つて以降、一切我が物とせず、官吏人民の戸籍を管理し、府庫は封鎖して、將軍がやってくるのをお待ちしております」と話していましたね。それから、范増が劉邦に対する警戒をさらに強めたのもこのことがきっかけでした。曹無傷の讒言で頭に血の上った項王に范増はこう告げていました。

沛公の山東に居りし時は、財貨を貪り、美姫を好めり。今、関を入りて、財物を取る所なく、婦女を幸する所なし。此れ其の志、小には在らざるなり。

もう改めて指摘するまでもないことですが、「其の志、小には在らざるなり」というのは、沛公は変わった！今やヤツの志は天下にある！ということでしたね。その時のことが留侯世家にも取りあげられているんですね。当たり前なんです、基本的なストーリーは変わらないんです。でもよく読むと項羽本紀では語られていない真相？が見えてきます。

まず、見逃していけないのは、「意留まりて之に居らんと欲す」の「意」です。「意」というのは「気持ち」ですね。沛公は秦の宮殿の壮麗な様子をみて、「おれもうここにいます！」っておもったんです。沛公、やっぱり変わってないんですね。それがこのひと言に示されているんですね。で、その「意」にいち早く気づくのが樊噲なんですね。樊噲は宮殿の外で宿営するように勧めます。なぜか？もう説明するまでもないですよ、沛公がなにを考えているか、樊噲は見抜いているんですね、沛公が碌なこと考えていないこと、ばれてしまっているんです。このままだともうどうなるか分かるから、さっさとこんなところ出て、どこかで宿営しましょうと勧めるわけですね。鴻門之会の後段を読んだ際に、田中謙二は、樊噲のこと「殺戮しか能のない」猟犬的人間とみなしているが、どうもそうではないのではないか、というような指摘をしておきました。ここなども所謂教養とは別の樊噲の透徹した智慧を見出しでもよさそうな場面ですね。

次の一文もいいですね。「沛公聴かず」って、沛公、樊噲の諫言をまったく聴く気ないんです。そして張良の登場です。「そもそも秦が無道をしたからこそ、沛公様はここまでくることができたのです。天下のために非道の輩を討とうとするのであれば、清廉を根本としなければなりません。いま秦に入ったばかりなのに、途端にそのような楽しみに安んじようとなさるは。それこそ桀を助けて虐をなすというものです。忠言は耳に逆らうものの行いには役立ち、劇薬は口には苦いが病には役立つと申します。どうか沛公様、樊噲のことをお聞き入れください」、やはり理路整然としていますね、さすが張良です。樊噲との関係も見事です。

張良の言葉にある「今始めて秦に入り、即ち其の楽しみに安んず」の「即」も効いていますね。この「即」は心理的にも物理的にもぴたっとくっついているという「すなわち」でした。張良の言葉を通して沛公のダメさ加減が語られているわけです。

張良の言葉の直後にはもうひとつの「すなわち」、「乃」がみえていますね。「沛公乃ち軍を霸上に還す」。こちらは心理的にも物理的にも結びつきがたいものがつながる「すなわち」でした。不平をならしながら霸上に軍をかえす沛公の姿が浮かんできますね。NHKの番組でもこの場面が取りあげられていましたね。「この時、劉邦にも天下を治める者としての自覚が芽生えてきていたのです」というようなナレーションが入っていましたが、留侯世家によれば、まったく別の劉邦像が描けそうですね（もちろんどちらが事実かなんてもう分からないんですが、どちらの劉邦がより劉邦らしいでしょう……）。

それから忘れていけないのは范増です。項羽本紀にみえていた范増の「地元にいた頃の沛公は金にも女にも汚いやつでした。それが関中に入った途端、どちらにも一切触れていないとのこと。これはヤツが天下を志したからです」という科白、そこから溢れている沛公に対

する警戒心は、留侯世家の記述によれば、とんだ誤解だったということになってしまいうわけです。これって歴史の皮肉ともれますし、また、面白さとも解せますが、いかがでしょうか？ また、こういう読み方ができるのも、紀伝体なればこそ、ということも重要ですね（簡単にいえば、ひとつの事件に関する異なる記述を散在させることで、多角的な読み方ができる、あるいはそういう読み方をみつけた人にだけ読めるように書かれているということです）。

『史記』は紀伝体というスタイルで編纂されていること、ひとつの事件があちらこちらで取りあげられることがあるということ、それらの間には互いに矛盾するような記述もあるということ、などこれまで何度か触れてきたとおもいます。これもそのような例のひとつですね。こういう時、唯一の事実を求めなければならない、という立場も当然あるとおもいます。でも文学の立場からはそうでなくても一向にかまわないんです。それよりもどうしてそんな読み方ができるんだろうか、と考える方が重要なんですね。で、考えてみると、そもそも紀伝体がそういう複数の異なる事実の並列を許容する叙述方式なんです（形式と内容の関係も文学にとっては非常に大きな問題です）。おそらく司馬遷はそういう紀伝体の特徴を自覚的に用いていたんじゃないかとボクはおもっています。あるいは、ひとつの事柄、ひとりの人間を、多角的に眺めることのできる表現形式によって司馬遷の世界を見る目も開かれていったのではないかとおもうんです。

『史記』の記事に矛盾があるのは、パソコンのない大昔のことだから仕方がないんだ、という考え方もあるという話は以前したとおもいます。たしかに五十数万字の大著述ですから隅から隅まで矛盾がないなんてことはありません。でもボクが問題にしているのはそういうことではなくて、先行資料に対する司馬遷の基本的な態度なんです。もし、司馬遷がただひとつの事実のみを書くこうとするなら、一事に一記録を採用すればいいわけで、紀伝体という方法とはなくともよいわけです。でも、司馬遷は紀伝体を選んだんです。こちらは張良側から描かれた記録を取り込み、あちらは項羽サイドで残した記録を嵌めこむ、というやり方です（それに関連して、もうひとつ指摘しておきたいのが『史記』には時々相互参照を促す文言があるということです。留侯世家の中にもそれはみえています。「語は項羽事中に在り」というのがそれです。鴻門之会については項羽本紀と相互参照してくださいとの指示です。決して留侯世家は留侯世家だけで独立しているわけではないんですね。ここからも、一事についての複数の異なる記述が無自覚のまま放置されているわけではなく、それ自体が司馬遷の主体的選択の結果なのではと考えられるのではないのでしょうか……）。

では次に高祖本紀をみてみましょう。

みなさんが多く指摘されているように高祖本紀の漢王（劉邦）は理想の為政者として描かれていますね。まず関中入りを果たした時点で漢の元年が称されていることが注目されますが（これは後に遡って定められた紀年です）、降伏してきた秦王の子嬰を誅殺せよ、との声に、「懷王がわたしを遣わしたのは固よりわたしが寛容であるからだ。しかも相手は降伏しているというのに、これを殺すのは不祥である」といって、子嬰を役人に引き渡して身柄を保護させます（項羽本紀では、鴻門之会の数日後、項王が秦宮に入ると、子嬰は殺されていましたね）。

咸陽宮に入場した場面もさりげなく挿入されています。

遂に西のかた咸陽に入る。宮に止まりて休合せんと欲す。樊噲・張良諫む。乃ち秦の重宝・財物を府庫に封して軍を霸上に還す。

でも女性に目が眩んだなんて書いてありませんから、咸陽宮で長旅の疲れを癒やそうともおもったのかな、程度にしか読めませんね。しかも、樊噲・張良がそれも諫めたため、何も手をつけずに再び霸水を渡りなおして霸上に駐屯した事になっています。ここにある「乃」は（本当なら休息を取ったり、財物に手をつけたりするのが当たり前なのに）「なんと」という語感でしょうか。留侯世家とはずいぶん違った印象になりますね。

次は有名な法三章のエピソードです。これも大変用意周到な配慮がされています。街の有力者たちをあつめて、治安維持のため必要な、殺人・強盗・窃盗という犯罪以外は過酷な法律をすべて撤廃することとともに、今まで通りの生活を官民ともに保証する、そして、その上で、秦の役人とともに使者をやつてそのことを布告させる。占領政策の見本みたいなやり方です。

ここで面白いなおもうのは、旧秦の人々がよろこんで、差し入れをもつてきて、軍士らを饗応しようとしませよ、それに対して沛公は「まだ食糧は豊富にあり、困つてはおりません。無用な出費をさせることは本意ではありません」とこたえて、辞退するじゃないですか、これが、ほんの数日前、咸陽宮の財物や女性に目の色を変えていた沛公、樊噲と張良に諫められて引きずられるようにして秦宮をあとした人物の言葉だつてところなんです。これ、張良や樊噲はどういう目で眺めていたんでしょうね。やれやれまったく……ですかね。さすが沛公様！ですかね。やつぱりこの時の沛公も財貨を貪り美姫を好む沛公なんですよね（でもその一方で諸県から集められた父老や豪傑たちの前では秦の過酷な法律に苦しめられてきた彼らを本心からいたわれる人間なんだろなあという気もしてくるんですね。そのあたりが樊噲や張良が沛公をしたう理由なのかなあと読み手は感じ、人間という存在や運命といったものに感慨を催すことになるわけです）。

さあ次は鴻門之会の前段にあたる部分、沛公が鯁生の進言を聞き入れて函谷関に守備兵をおくる場面です。これも当然、大枠は項羽本紀で語られたとおりなんです、ニュアンスは微妙に異なっていることに気づくとおもいます。項羽本紀では「鯁生のヤツが、わしに、函谷関をふさいで、諸侯を閉め出せば、秦の地はすべて沛公様のものですよ、などと言ったのだ」と沛公の口を通して顛末が語られていましたが、高祖本紀では「秦の富は天下に十倍し、地形強し。今聞く、章邯、項羽に降り、項羽乃ち号して雍王と為し、関中に王たらしむと。今、則ち来たらば、沛公、恐らくは此を有つを得ざらん。急ぎ兵をして函谷関を守らしめ、諸侯の軍を内る無く、稍く関中の兵を徴し、以て自ら益して、これを距ぐべし」と鯁生の策がかなり詳細になっているだけでなく、項羽側の非が説かれ、秦の地勢や善後策なども記されているために、作戦として相応の見込みがあったように読めますね。これももちろん、項羽本紀、高祖本紀のどちらが正しいのかという問題としてはなく、それぞれの箇所はどう読めるのか、また、『史記』はどうしてそういう齟齬をそのままにしているのか、という問題として考えなければなりません。

その後の部分はそんなに指摘する部分はありませんが、高祖本紀では、鴻門之会の前夜、項羽に攻撃を思いとどまるよう説得したのは項伯ではなく、沛公の書面ということになっていきますね。しかも「因りて文を以て論し、項羽乃ち止む」とありますから、項羽は沛公の説得によって、この段階で攻撃を思いとどまったという風にも読めます。項羽本紀の方では「沛公が先に関中入りを果たさなかったらあなたは入ることができましたでしょうか。相手に大きな功績がありますのにそれを討つのは正義に悖ります。功績にしたがって厚遇すべきです」との項伯の言葉に、「項王許諾す」とありました（これによって項王との面会がかない、鴻門之会が催されることになったわけでした。項莊に対してもそうでしたが、項羽はどうも身内に甘い人なんです）。

鴻門之会そのものはずいぶん省略されていて、冒頭の沛公の科白はすべてカット、「謝す」の一語で済ましてしまっています。項羽の方も「此れ沛公の左司馬曹無傷これを言う。然らずんば、籍、何を以て此に至らん」という科白のみ。その次は、「沛公、樊噲・張良の故を以て、解き帰るを得たり。歸りて立ち所に曹無傷を誅す」とあっておしまいになっています。その後は、咸陽宮における項羽の狼藉と不当な論功行賞の記述がそれなりのボリュームで続いていますね。沛公が、巴・蜀・漢中という辺境の地に押し込められたことも、沛公が得るはずであった関中は、章邯・司馬欣・董翳という旧秦の三將に与えられ、分割統治されることになったということもその中に記されていました（前にもどこかで話しましたが、これはどう考えても失策でして、この後、劉邦軍は一旦は関中に引きこもりますが、夏侯嬰・蕭何によって韓信が見出され、大将に任命されると、漢軍はあつという間に関中を手中に収め、これが漢が最終勝利を得る一要因となるのでした）。

◎まとめにかえて

吉川幸次郎「人間とは何か―文学研究への私の道―」（『学問のすすめ』筑摩書房、一九六八年）より

鈴木先生から、訓読で清朝の文章をならったんだけど、いちいちの言葉の裏にあるこまかい心理というものを、先生は寡黙な人だったから、雄弁には語られないけれども、くわしく発掘して教えられたのです。言語というものは、単なる字引的な意味のつらなりとして読むべきでなしに、その場その場の一回限りのパトス、ロゴスもあるでしょうけれども、より多くパトスの表現でありうる、ということをはじめて知った。ことに普通は、大ざっぱなことしかいえないと考えていた漢文、ぼくもそのころはそう考える傾きが大いにあったんですが、その裏に、こんなこまかな心理があるということを知った。これははじめはちよつと信用しにくかった。こんなにこまかに分析するのは、少しオーバーではないかと思って、信用しなかったんだが、だんだん先生の読み方がわかるようになった。鈴木先生には三高では一年ならただただだけれども、そうした読み方の方が真実だということを中国語を材料として知った。それから大学へ入ると、狩野先生は、いっそうそうなんです。はじめ聞いたのは元曲の講義です。これもはじめはこんなこまかなものがほんとうに裏にあるのかと、疑ったんですけれども、それはその通りだということを知ることができました。



鴻門之会を「読む」ワークシート①

学籍番号

氏名

I. 以下の疑問を考えながら自分なりの読みを深めてみましょう。

(1) 沛公は何故、みずからを「臣」と呼び、へりくだったのか。

(2) 項羽は何故、簡単に沛公を許したのか。

(3) 宴会の席次は何故、記されているのか。

(4) 范増は何故、沛公の暗殺にこだわったのか。

(5) 項王は何故范増の目配せを無視したのか。

(6) 范増は何故みずから手を下さず項荘に剣舞にことよせて沛公を斬り殺すよう命じたのか。

(7) 項王は何故項荘の剣舞の申し出を受け入れたのか。

(8) 項伯は何故項荘の剣舞の相手をし沛公をかばったのか。

(9) 張良は何故、樊噲を呼びに宴席を外したのか。

(10) 項王は何故、樊噲を気に入ったのか。

(11) 項王は何故樊噲の演説に応えられなかったのか。

(12) 沛公は何故樊噲を連れて宴席から外れたのか。

II. それぞれの登場人物はどのように描かれているか、簡潔にまとめましょう。

項王

沛公

范増

張良

項伯

樊噲

中国古典学講義Ⅱ鴻門之会を読む

「その時歴史が動いた」をみる

年 月 日

専攻	学年	学籍番号	氏名	評価

I. 番組では項羽と劉邦がどのような人物として描かれているか。

【項羽】

【劉邦】

武・勇・義

〔 〕

〔 〕型

人心掌握型

筋を通す〔 〕の人 〔 〕を大切にし〔 〕をとる

II. 項羽と劉邦の人柄を示すエピソードとその行動の理由・効果がどのように描かれているかをまとめてみよう。

・宋義殺害（ ） ・無血開城（ ）

・趙の救援（ ） ・酈食其との面会

・降卒虐殺（ ） （ ）

・函谷関到着後の激怒 ・投降した秦王の処遇

（ ） （ ）

・攻撃一旦中止の判断 ・咸陽宮入城後の措置

（ ） （ ）

軍師・范増は（ ）として ← （ ）としての自覚

あくまでも劉邦を殺すよう項羽に進言

III. 番組が設定する鴻門之会の構図は？また項羽と劉邦の行動とその意図はどのように描かれているか？

（ ）を隠す劉邦、暴く項羽

・劉邦が「臣」と称した理由

・項羽が宴を開いた理由

・席次についての説明

・項羽が范増を無視した理由

・剣舞に劉邦が反応しなかった理由

・樊噲に対する項羽の反応

・項羽が樊噲をもてなした理由

・樊噲の演説に対する項羽の反応

IV. 番組をみて気付いたことをまとめてみよう。

V. 映像と文字という媒体の違いについて考えてみよう。

中国古典学講義Ⅱ鴻門之会を読む

「その時歴史が動いた」をみる（解説編）

I. 番組では項羽と劉邦がどのような人物として描かれているか。

《テーマ》天下を取るにふさわしい次世代のリーダーはどちらか？

【項羽】

武・勇・義

率先垂範型

筋を通すプライドの人

【劉邦】

知・仁

(知略のカリスマ・仁而愛人)

人心掌握型

目的を大切にし実をとる

II. 項羽と劉邦の人柄を示すエピソードとその行動の理由・効果がどのように描かれているかをまとめてみよう。

すべての行動が上に挙げたふたりの性格から説明されている

・宋義殺害（秦打倒の大義のため）

・無血開城（戦わずして勝つ）

・趙の救援（すさまじい破壊力）

・酈食其との面会

・降卒虐殺（秦打倒の大義のため）

(年長者を敬い、意見に耳を傾ける)

・函谷関到着後の激怒

・投降した秦王の処遇

(劉邦に先を越されてしまった)

(殺すのは不祥として役人に預ける)

(本当の功劳者は自分である)

(寛大な処置に劉邦への期待が高まる)

・攻撃一旦中止の判断

・咸陽宮入城後

(劉邦の真意を確かめるため)

(宮殿を封鎖し、軍を覇上に引き返す)

范増「其(劉邦)の志、小には在らざるなり」←— 天下を治める者としての自覚が芽生えた

あくまでも劉邦を殺すよう項羽に進言

III. 番組が設定する鴻門之会の構図は？また項羽と劉邦の行動とその意図はどのように描かれているか？

《番組が設定する鴻門之会の構図》

「天下への野心」への野心を隠す劉邦、暴く項羽

・劉邦が「臣」と称した理由

項羽の風下に立ち警戒心を和らげるため

・項羽が宴を開いた理由

劉邦に野心がないか確かめるため

・席次についての説明

劉邦を范増の下座において立場の違いを視覚的に示す

・項羽が范増を無視した理由

証拠のないまま劉邦を殺しては後世に汚名を残すから

・剣舞に劉邦が反応しなかった理由

野心をひた隠しにしてこの場を切り抜けるため

・項羽が樊噲をもてなした理由

樊噲が自分に敵意をもっていないか試すため

・樊噲の演説に対する項羽の反応

樊噲の説得にプライドを呼び覚まされ劉邦を赦す

IV. 番組への突っ込みどころ…

・項羽と劉邦に焦点があたり、范増と張良という軍師による智謀の対決が薄れてしまっている。

・鴻門之会の立役者である項伯、また項伯と張良の関係が完全に抜け落ちてしまっている。

・一人で剣舞する項莊

・剣舞をみて喜ぶ項羽

・危険を察知して闖入する樊噲

(→仕留められちゃうよ…)

(→え、おバカなの?)

(→え、エスパーですか?)

・殺気が消えたあとの和やかな宴席の様子、隙をみて厠にいくふりをして虎口を脱する劉邦

授業の解釈と NHK の演出とは随分異なっている → 留侯世家・高祖本紀を読んでみよう！